

東日本大震災と私、

作成者 A.T

東日本大震災

2011年（平成23年）3月11日14時46分頃に発生した地震（東北地方太平洋沖）とそれに伴う被害の総称である。

マグニチュード 9.0 最大震度 7

死者数 15578人（7月9日時点）

負傷者数 5694人 (〃)

行方不明者 5070人 (〃)

世界でも最大規模の地震となり、戦後最大の負傷者を出した。津波による被害が大きく、最大で40.5mの高さを記録。破滅的な被害をもたらす。福島大2原発が被害を受け、放射性物質が流出し、多方面で甚大なる被害をもたらした。

目次

[1 震災時の様子](#)

[2 震災後3ヶ月間の私の動き](#)

[3 今、私にできること](#)

1. 震災時の様子

地震発生当時は、教室にて先生を待ち、始業となるのを待っている最中であった。この授業が終われば放課。中高一貫校に通う我々は卒業認定テスト（高校入試）を終え安堵のひとつきを味わい、体育の後の汗をひやししながら、学活である最後の授業がゆるりと流れるのを感じていた。テストの答案が返ってきたわけではないが、合格点を超えたであろうことを期待して、卒業までの短い学校生活を感じていたのだった。とはいっても高校との合同での卒業式のため、もうすでに卒業式を終えていたのではあるが。そのため、正確には4月から始まる高校生活を考え、春休みを待ち遠しく思っていたと言った方が適切かもしれない。ただ、どこもない寂しさを卒業の実感のわからないまま感じていたのであった。

そんな中突如揺れが始まった。始業時間から1分が過ぎた頃であった。先生はまだ来ない。遅くなるのかなぁと思いつつ、どうこうしようともない時間をのんびりと過ごして

いたためか揺れに対して、落ち着いて認識し、対処することができた。先日一度予震を体験していたためかもしれない。はじめはまたすぐに収まるだろうと思い机の下に隠れたりしなかった。先ほどまでゆっくりと、脱力感さえ程なく感じさせる空気が少し、騒ぎ始めた。

揺れは続く。皆が机の下に隠れるのをみて、私も後を追うように隠れた。予想に反して、揺れは強く、そして長く続いた。少し収まったかと思えば、また強く揺れ、机の下に潜るという行為が何度か続いた。電灯が幾度か点滅し、消えた。クラスには少し驚きの声上がる。そんな中私は、今思えば不謹慎なほど落ち着いていた。私と同じように落ち着き払っている、近くの友達と震度やマグニチュード、震源などを予想しあった。仕舞いには、私も、その友達も読書を始めた。しかし、震災の被害が明確に知りつつある今、そのときの自分の行動を振り返ると、私のとった行為はとても罪深く、震災の被害者の方々に対して、顔向けできないほどに恥ずべきものだったと、深く後悔、反省している。そんな風に平然と対処していた私ではあったが、あまりに続くよい揺れに、少しずつ不安と焦りが現れ始めたのではあった。

当然のことながら一定の揺れが収まるすぐさま緊急の放課となった。帰宅の準備の用意をさせられた全校生徒が第一体育館に集められた。そこで地震について初めての情報が知らされた。マグニチュード8.8。阪神大震災は6.8ぐらいだっただろうか。うる覚えの記憶とともに、あの巨大な高速道路が倒れている映像が自然と頭の中によみがえった。あの写真をはじめてみたときとても衝撃を受けたのを覚えている。そのときはまだ、この世に生を受けてはいなかったが、その写真を見て、被害の大きさを想像し、身震いがした記憶がある。その写真やテレビの映像でしか被害の実態を知りはしないが、それ以上の被害がこの地震ででたのだろうと思った。だがこのときは、単にそう思っただけであり、その思いにとっても重みは感じられないものだった。当然である、今までに体験したことのない、前代未聞の大震災に見舞われたのだ。誰しも、これからの日本を明確に想像できたものはいなかったであろう。

信号が停止していると全校生徒に伝えられ、注意して帰るよう呼びかけられて、帰宅の方法が決まったものから、集団で帰って行く。当然のことながら、電車は運転を停止、羽後交通が緊急のバスを手配してくれ、多くの人々がそれを利用しようと学校を後にした。市内の人々がそれを利用するのだ、混雑するのは目に見えている。混雑して大変だろうなと思い、遠慮すればいいのにと少しだけ思ったが、今はそんなことを言っている場合ではない。少しでも早く、安全に帰宅することが第一の優先すべきことなのだ。少しぐらいの不便さでは、あきらめることはできなかったのだろう、そう考え私は体育館から出て行く人を見送った。まだ帰る方法が決まっていない不安とともに。

家までの道のりが長くない生徒たちは、友達を誘い徒歩で帰って行く。これは普段のように仲良しだから、というものではなく、大きな揺れを体感した後による不安を打ち消すためであることが、その人たちの表情からうかがえた。体育館は、今までに感じたことの

ない、うまい言葉が見つからないような、少し重苦しく、しんみりとした、寂しげで不安げな空気が漂っていた。

はじめは私も家まで歩いて帰ろうとしていた。家までだいたい10km強と言ったところか。少し遠い気がするが、いけなくはないだろう。私の友達もそれくらいの距離を5分ほど前に歩いて帰っていった。それに一度、歩いて、登下校してみたかったし。とは言っても、今はそのような楽しい気分で下校できることはなかっただろう。町はきっと不安げな人々に包まれ、重く静まりかえっていたに違いない。だが、結局のところ、父の仕事が終わるのを待ち、迎えにきてもらうこととなった。それを決定させたのは、父から、仕事が終わったら、迎えにくるというメールを受けたことだった。

私たちのように、すぐに帰ることのない生徒は会議室に集められた。私はそこでもまた、不謹慎ながらも読書をして過ごしていた。だが、全くページをめくることはなかった。本の中の活字は読まずに、これから地獄が始まるんだろうなど、心の中で思っていた。あの、映像や写真で見た、阪神淡路大震災を超える被害が宮城県で起きているんだろうと思っていた。だがこのときもまた、それは壮絶なる思いで感じていたのではなく、阪神淡路大震災を経験しなかったせいなのか、きっとそうなのだろうなという想像でしかなく、全く実感がわかなかった。もしかすると私が読書をしていたのはこのような不安で、地獄のようは予想を、確信したくなく、その思いを紛らわすためだったのかもしれない。

会議室に集まった友達と、自分たちの家がどうなっているか不安を話し合っているときだった。私の携帯電話が鳴り出した。祖母からだった。先生たちが何度も生徒たちの親に電話をかけ、連絡を取ろうとしてもなかなかつながらないなか、よくこの電話は通じたな、と思いつつ、電話でこちらのことを話した。祖母は私たちのことを心配してくれたが、私は祖母たちのことの方が心配であった。何しろ、少しぼけが始まっているような祖父との高齢者二人暮らしなのだから。

後から聞いたことだが、祖母は地震後何度も私に電話したらしい。そんな中あの電話が一本通じたらしいのだ。これを聞いたとき、とてもありがたいと思った。私のことを心配して、つながるまで電話をかけ続けてくれる人がいることがとてもうれしく、暖かかった。

父が迎えに来て、信号が動いていないため、車の通りが少ない、山道を帰路とし、家に向かった。想像していたとおり、町は異様な空気に包まれ静まりかえっていた。母方の一人暮らしの祖母を迎え、家族5人でその夜を過ごした。誰も経験したことのない夜。明日にはどうなっているか分からない不安を残して、その日は眠りについた。震災の爪痕を考えると、そのまま、安息の夢の中にずっと居たい気がするが、それを夢だとも思わせないような地獄が、次の日、テレビに映されたのだった。

2. 震災後3ヶ月間の私の動き

大きく印象に残っているのは、被災地である[釜石市](#)に行ったことだろうか。確かゴー

ルデンウイークの時だった気がする。被災地を自分の目で見て、自分の足でその土地を歩きたいと思っていた。そうすることでテレビだけでは感じられない何かが、得られると思っていた。テレビで映される映像は壮絶なものばかりだが、きっとテレビカメラには映らない、私たちには想像できないような現状がそこには広がっているのだろう。決して興味本位ではない。戦後最大の国難を自身の五感で感じることは、よい体験といえは語弊があるが、これからの人生の中で、大きな意味を持つものとなると感じていた。それにお金を少しでも落として、復興の役に立てればよかった。

向かう途中、自衛隊の車に何度もあった。というより自衛隊と一緒にそこに向かったと言っているほどだった。父が運転する車の前後に自衛隊の車。自衛隊の人々が、被災地の人々が、がんばっている中で、なんだか遊びに行っているような感覚がして、すごく申し訳なかったが、観光ではなく、今の日本を、被災地を知ることが目的、と自分を言い聞かせた。ほかにも、緊急車両などとすれ違った。道を行くほど、すれ違う車の数は多くなり、ついには反対車両に短い渋滞ができていた。避難してきた人々だろう。被災地に向かう車は、3台ほどで、ついには、1台だけとなった。

それを見たとき、私は目を疑った。はじめに飛び込んできたのは、家の周りに積み重ねられた、壊れた多くの家具だった。一階の部分はもう骨組みしかなく、傾いている家や、窓ガラスが割れ、屋根が落ちている家。そこに人が住んでいたとは思えないくらい、家々は跡形もなく、壊れていた。そこに住んでいた人たちはどうなっただろうか。生死さえも分かりえない。生き残った人たちはどこにいて、何をしているのか、何を思っているのか。想像もつかなかった。あまりの壮絶さに考えなくなっただろうか。たぶん、私にはそこに広がる光景をただ見ることしかできなかった。

ほかにも、線路や、電線、工場の一部など爪痕はすさまじいものであった。その光景は今でもよく覚えている。だが、言葉では言い表せない。それくらい、の光景がそこには広がっていた。映画に出てくるような、廃墟と化した町のような、とにかく本当にすさまじいものであった。私は必死でその光景を目に、脳に焼き付けようとした。一生忘れることのないように。町は、震災当日に私が帰宅途中で感じたような異様なもので、物静かで、そこに生気がないような空気がそこにはあった。いや、それ以上の重苦しいものが漂っていた。

不思議なことに、津波の被害は本当、紙一重でまるつきし変わってしまった。というのは、道路一本を挟んだだけで、家の崩壊具合が全く違ったのだ。道路を挟んで、海側は、一階部分が骨組みだけになっているのに対し、反対側は、全く被害がなかったのだ。もしかすると、浸水はしていたのかもしれないが、見た目的には、何の変哲もない状態であった。おもしろいことに、(被害を楽しんでいるわけではない) その境目となる道路は市道で、どこにでもあるような小さな道路であった。地形的にも道路を挟んで、起伏があるわけでもなく、平坦であった。きっと人の生死は紙一重で変わってしまうのだろうか。我々は、それほど大きな被害はなかったが、我々が被災者とならなかったのも、ちょっと

した要因なのかもしれない。被災者となるかならざるかは、簡単なことで変化し、人生においても、自分ではわからないくらいの小さな要因で大きく変わってしまうのだろう。

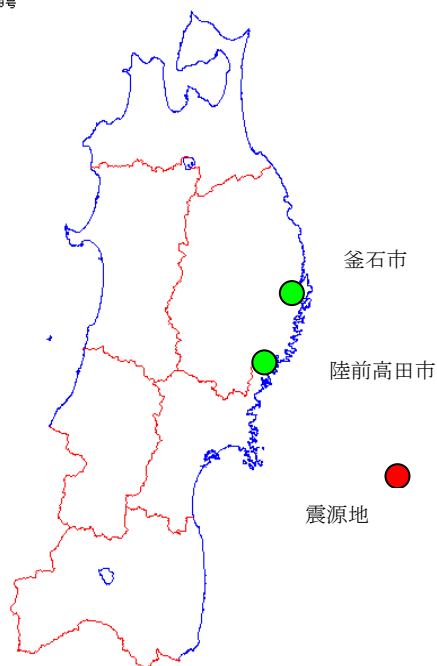
夏休み、サッカー部の合宿で陸前高田市にも行ってきた。そこはすべてが津波によって流された後だった。民家があった跡が残されていた。ここが玄関だったのだろうか。もう言葉は出なかった。監督の話によると、海岸にはサッカーグラウンドがあったらしいが、そこはもう海となっていた。何十メートルもの砂浜はすべて、海の下に沈んでしまったようであった。壮絶、そうとしかいえなかった。今思い返しても、鼻の奥が熱く、目には涙がこみ上げそうになる。

3. 今、私にできること

被災地をみてきたにもかかわらず、私は、日々の生活を去年までと同じように過ごしていた。毎日の日々に感謝することもなく。あの被災地の光景を見ても、私の心には、心境の変化はないのだろうか。自分が悔しい、情けない。そう思っても毎日の生活は変わらない。私は人として欠けている。

せめて、今度被災地へ、ボランティアに行こうと思う。いつになるかわからないけれど、いつかきっと。自分でも力になれることを。

国土地理院承認 平14総報 第149号



We were hit by a strong big earthquake on March 11, 2011. But I was not surprised so much. I thought that Miyagi was damaged very much. I was filled with the anxiety about our future.

I went to Kamaishi city in the golden week holidays. And I went to Rikuzentakada city in my summer vacation. Many buildings were washed away by the Tsunami. It made me shock deeply.

I want to do volunteer for the recovery.

参考文献

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E5%8C%97%E5%9C%B0%E6%96%B9%E5%A4%AA%E5%B9%B3%E6%B4%8B%E6%B2%96%E5%9C%B0%E9%9C%87>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%A4%A7%E9%9C%87%E7%81%BD>

完成日 9月9日